

こども科学研究費補助金（成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業）
総合研究報告書

低年齢児保育が子どもの発達等に及ぼす効果・影響の解明のための研究
研究代表者 箕輪 潤子 武蔵野大学教育学部 教授

研究要旨

本研究プロジェクトは、日本における低年齢児の保育実践の質を探索した上で、低年齢児が保育所等で保育を経験することと子どもの発達の関係について検討するための尺度を作成すること、作成した尺度で子どもの発達と保育の質の関連を試行的に検討することを目的としている。

R6年度は、日本における低年齢児の保育実践の質を探索することを目的として、①低年齢児保育に関わる保育施設の管理職や、研究者へのインタビューデータの分析と、低年齢児保育を行う保育施設への質問紙の回答の分析による、「低年齢児保育の質」の要素の整理と、低年齢児保育の実態の検討 ② ①を踏まえた低年齢児保育プロセスの質尺度の開発と、仮調査・本調査ならびに、子どもの発達調査を行なった。

研究分担者氏名・所属研究機関名及び所属研究機関における職名

箕輪潤子・武蔵野大学教育学部教授
峰友紗・武蔵野大学教育学部准教授
今福理博・武蔵野大学教育学部准教授
淀川裕美・千葉大学教育学部准教授
管井洋子・川村学園女子大学教育学部教授
堀科・東京家政大学・家政学部准教授
猪熊弘子・駒沢女子短期大学・保育科教
授

以上 11 名

A. 研究目的

本研究プロジェクトの目的は大きく 3 点に整理することができる。

第一に、日本の保育所等における＜低年齢児の保育実践の質＞を探索すること。第二に、低年齢児の保育実践における質、特に「プロセスの質」を捉えるためのツールを開発すること。第三に、作

成した尺度を踏まえ、子どもの発達との関連について試行的な調査を実施すると共に、尺度を外部評価に用いる際の研修や、園内研修等に用いるための方法を開発することである。

令和 6 年度は、1. 低年齢児保育を対象とした研究を行う研究者や、低年齢児保育を行う園の管理職へのインタビューの実施と、インタビューデータの分析による「低年齢児保育の質」に関わる要素の整理 2. 低年齢児保育を行う保育施設への質問紙の回答の分析 3. 低年齢児保育プロセスの質尺度の開発と、仮調査・本調査ならびに、子どもの発達調査 の 3 点を実施することを目的とした。

B. 研究方法

1. インタビュー・質問紙調査の分析

①研究者・低年齢児

保育を行う施設の管理職に対し、低年齢児の保育の質についての考えや、低年齢

児の保育の質を評価する尺度・ツールについての考えを、半構造化面接法を用いてヒアリングした際のインタビューデータの分析を行なった。②国内外の先行研究、保育所保育指針を踏まえ、低年齢児の保育の質（プロセスの質・構造の質）・保育所等の保育の状況に関する項目を作成し、質問票にしたものを、保育所等に勤務する保育士、管理職に送付し（R5年度）、戻ってきた回答について、量的・質的に分析を実施した。

2. 質問票の質問項目を中心として低年齢児保育プロセスの質尺度（仮）を作成し、インタビュー調査の分析結果、質問紙調査の分析結果を踏まえ、「低年齢児保育室尺度案」を作成、仮調査・本調査1回目を実施した。また、本調査では、子どもの発達調査も併せて実施した。

<倫理面への配慮>

武蔵野大学教育学部倫理委員会の承認を受けた（承認番号 R6-002）

研究者、保育所等の管理職へのヒアリングについては、研究目的及び研究内容と、データを分析に使用する旨の説明を行い、同意を得た場合に実施した。

質問票による調査については、質問票の表紙に研究目的及び研究内容を記載すると共に、調査で回答いただいた内容は、学会・論文・報告書等での報告並びに、低年齢児の保育の質に関する尺度・ツールの開発のみに使用する旨と、回答に協力した園や個人が特定されないことを記載した。

尺度を用いた調査については、事前に園に説明を行うとともに、同意書への記載を依頼した。

C. 研究結果及び考察

1. インタビューデータと質問紙調査の分析結果

(1)低年齢児保育の質に関わる要素の抽出

1)管理職が考える低年齢児保育の質（箕輪報告）

低年齢児保育を行う施設の管理職に、低年齢児の保育の質について考えていること、低年齢児保育で大切にしていることについてインタビューを行なったデータを分析した結果、【愛着の形成】【個の尊重】【心地よく過ごすための環境】【生活・経験・発達を支える】【発達・保育の知識】【子どもの理解】【集団としての保育】【保育者同士の連携】【保護者との連携】の概念が見出された。

2)保育者が低年齢児保育で大切にしていること（菅井報告）

0、1、2歳児クラスの担任保育士・保育教諭 2,727名の、質問票の設問「保育で大切にしていること」への自由記述回答を検討した結果、【子どもの気持ちや思いを尊重した関わり、発達に応じた保育】【安心して過ごし活動できる環境や生活リズム】【担任、保護者、職員、看護師の連携や情報共有】【子どもの健康管理】【丁寧な関わりや保育】【子どもとのスキンシップ】【信頼関係・愛着関係の構築】の概念が見出された

3)保育者が困ったり悩んだりしていること（堀報告）

0、1、2歳児クラスの担任保育士・保育教諭 2,727名の、質問票の設問「低年齢児保育で困難に感じていること」への自由記述回答を分析した結果、【発達に応じた環境づくり】【子ども理解と保護者対応】【保育者間ならびに家庭との連携】【④長時間保育等に対応する職員配置】【月齢や個人差に応じた活動内容】【低年齢児特有の様々な配慮への対

応】【子ども同士のトラブルへの対応】
の概念が見出された。

(2)低年齢児保育の質を評価することに関する視点

1)管理職・研究者の考える低年齢児保育の質の評価（淀川報告）

「低年齢児保育の質評価」に関する施設長・園長7名及び低年齢児保育の研究者8名へのインタビュー調査の語りの分析を行なった結果、管理職の語りは【保育の特性と評価の問題】【海外の保育の質評価スケールの活用】【国内の保育の質評価スケールの活用】【望まれる保育の質評価ツールの特徴や視点】【保育の質評価ツールを効果的に活用するための手立て】に整理された。また、研究者の語りは、【国内外の保育の質評価の動向や議論】【質評価の必要性和前提】【質評価の難しさ・懸念】【多様な評価方法】【評価尺度の活用方法】【評価尺度の特徴や機能】【評価尺度の視点や内容】【外部評価者】【尺度開発】に整理された。

2)エンパワーメント評価のあり方（猪熊報告）

保育施設の質向上に適した評価方法として、本研究で作成する評価スケールを用いた上で、評価対象となる組織や活動に評価者自身が関わりながら質の向上を図る方法を探ることを目的とした。エンパワーメント評価は、評価者と利害関係者が協働して評価を行う方法であり、評価の最終的な目的は組織自体の改善である。GT0(Getting to Outcome)という枠組みを応用し、評価スケールを用いて質の向上を図るプロセスを検討した。評価スケールを単に点数付けの評価に終わらせないため、エンパワーメント評価を取り入れることで、組織自体の力が向上すると考えられる。

(3)低年齢児保育を実施する施設の実態

1) 低年齢児保育の質に関する因子の分析ならびに、保育の質向上を支える保育者・施設長の研修機会との関連（今福報告）

2024年に実施した5000施設の質問紙調査の回答のうち、保育プロセスの質に関する項目（尺度項目のベースとなるもの）について、0歳児・1・2歳児それぞれの保育の質について、「意識」と「行動」の観点から因子分析を行った。その結果、いずれも4つの因子が抽出され、評価スケールとしての構造的妥当性が確認された。因子は、個別の発達や生活リズムへの援助、感覚・身体・感性・言葉・人間関係に関わる環境構成や援助などに分類され、現場の実践を反映していることを確認した。また、保育者・施設長の研修機会と保育の質との間には、有意な正の相関関係がみられた。

2) 低年齢児保育についての意識と実態（箕輪報告）

低年齢児保育を実施している保育所・認定こども園等の保育者が、保育実践においてどのようなことを重視し、実践しているのかについて質問紙調査の回答を分析し、保育実践に関する意識と実態について明らかにすることを目的として検討を行なった。結果、0歳児の保育では、主に子どもの生理的・心理的な欲求を満たすことと子どもの発達を支えることを、1・2歳児の保育では生活習慣の自立と他児とのかかわり、多様な発達を支えることが、低年齢児の保育プロセスの質に関わる要素であることが明らかになった。

3) 低年齢児保育の安全に関する保育者の認識（猪熊報告）

低年齢児を担当する保育者が「安全」についてどのように認識しているかを明らかにすることを目的に、質問紙調査の回答を分析した。保育者の90.1%が「睡眠中、プール活動・水遊び中、食事中などの場面で重大事故が発生しやすい」ことを認識しており、『保育所保育指針』等の事故予防に関する項目が浸透していると考えられる。一方で児童虐待が疑われる子どもへの対応やアレルギー対応への理解は比較的低い傾向が見られた。また睡眠中の安全に関しては「うつ伏せになった子どもをすぐに仰向けに直している」割合は半数以下(48.4%)に留まっていた。

4) 職場におけるソーシャル・キャピタルと低年齢児保育における保育観および保育実践との関連 (峰報告)

低年齢児の保育プロセスの質に影響すると考えられる要因のうち、

WSCが高い群ほど、自己評価による保育の質が有意に高い傾向が見られた。この関連はすべてのモデルで一貫しており、WSCの上昇が保育の質の向上と関連していた。WSCの高さは、若年層や正規雇用者、良好なメンタルヘルス状態とも関連していた。これらの結果は、WSCが保育者の協働性や精神的健康に寄与し、結果として保育実践の質にも影響を与えることを示唆していた。

2. 低年齢児保育プロセスの質尺度の開発

R5年度の質問紙調査の作成時に、尺度開発を見通して作成した項目を踏まえて低年齢児保育の質尺度案(仮)を作成した。インタビューデータの分析結果ならびに質問紙の回答の分析結果を踏まえ尺度の修正を行なった上で、仮調査を実施した。仮調査を終えた時点で分担者の意見を整理し、評価することが難しい項目

の文言の修正と、実際の園の保育に即して不足している項目を加え、尺度内容の調整を行なった。

また、開発した尺度を用いて2~3月に本調査の1回目を17園19クラスで実施した。

E. 結論

インタビュー調査と質問紙調査の分析からは、低年齢児保育のプロセスの質に関わる要素として主に、「基本的生活において、安心・健康・安全に過ごせる環境と関わり」「愛着の形成、子どもの人権の尊重を大切にした関わり」「経験と発達を支える環境構成と関わり」「職員間・保護者との連携」が見られた。この分析を踏まえ、『低年齢児保育プロセスの質尺度(案)』を作成し、本調査を実施した。尺度についてのインタビューでは、保育の質評価の重要性和評価尺度の有用性と懸念が語られていたことについて整理した。

R7年度は、本調査1回目の分担者・研究協力者(調査員)の意見を踏まえ、一部の項目の文言の加筆修正を行なう。また、本調査2・3回目を実施し、尺度の信頼性・妥当性の検証を行い、尺度を完成させるとともに、尺度を用いた園内研修・自己評価ツールを作成予定である。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

1) Junko Minowa, Hiroko Inokuma
(2024) What do Japanese daycare

directors think about the quality of care for infant and toddler? Poster presentation B28, 32nd EECERA ANNUAL CONFERENCE.

2) 菅井洋子・堀科・今福理博・淀川裕美・猪熊弘子・峰友紗・箕輪潤子

(2025)「低年齢児保育を担当する保育士・保育教諭の保育観 1：低年齢児の保育で大切にしていることの記述分析から」日本発達心理学会第 36 回大会

3) 堀科・菅井洋子・今福理博・淀川裕美・猪熊弘子・峰友紗・箕輪潤子

(2025)「低年齢児保育を担当する保育士・保育教諭の保育観 2 低年齢児の保育で困難に感じていることの記述分析から」日本発達心理学会第 36 回大会

4) Yumi Yodogawa, Shina Hori, Hiroko Inokuma, Tomosa Mine, Masahiro

Imafuku, Yoko Sugai & Junko Minowa.

2024 An analysis of Japanese researchers' perceptions of quality assessment and evaluation of early childhood care and education (ECCE) for children under age three., 国際幼児教育学会第 45 回大会

5) 淀川裕美・箕輪潤子 (2024)「低年齢児保育の質評価手法に関する保育実践者の認識,」日本乳幼児教育学会第 34 回大会

6) 箕輪潤子・猪熊弘子・堀科・菅井洋子「低年齢児保育に関する保育者の認識 (1)

-保育内容に着目して-」日本保育学会第 78 回大会 ※R6 年度末時点で発表予定

7) 猪熊弘子・箕輪潤子・淀川裕美・菅井洋子 (2025)「低年齢児保育に関する保育者の認識 (2) — 安全に着目して—」日本保育学会第 78 回大会 ※R6 年度末時点で発表予定

H. 知的財産権の出願・登録状況
なし